

# 学内広報

2018.8.27

no.1513



国際沿岸海洋研究センターの天井画 (photo: Yuji Yamamoto)



## LIXIL潮田東アジア研究拠点開室記念ラウンドスピーチ抄録

## ヒューマニティーズの新たな



石井洋二郎  
理事・副学長

蓮實重彦氏  
元総長

潮田洋一郎氏  
LIXILグループ取締役会長

五神真  
総長

## 大学が社会をよい方向に向かせる

**齋藤**◇互いに語り合うことがヒューマニティーズの一つのやり方だと考え、この場を設けました。では総長からお願いします。

**五神**◇蓮實先生からとても刺激的な内容のご講演をいただきました。私が2015年4月に総長に就任し、10月に東京大学ビジョン2020を発表した後、中国発の世界金融不安に始まり、ブレグジット、アメリカの大統領選挙……と2016年だけでも大きな出来事が続き、世界は激しく変化していると感じます。背景を探ろうと、日本のインターネット通信量の推移を見ると、2014年頃から加速度的に増えていることがわかりました。スマホの普及で人々の情報共有の方法がテキストから画像、映像へ移り、コミュニケーションの質が変わってきたのです。その結果、人類が数百年かけて培ってきた資本主義や民主主義のような社会を支える基本的な仕組みのチューニングが追いつかなくなっていると感じます。2016年秋から官邸の未来投資会議に参加しています。ここでは、デジタル革命がもたらす新技術を活用して格差を縮小し、誰もが参加できる、多様性を尊重する良い社会の実現に向けて、今何に投資すべきかという議論をしてきました。そのためには、科学技術だけでなく、社会システム、経済メカニズムとの連携が重要で、三位一体で新しい社会システムを創り出すことが必要です。一方で、デジタル革命はデータが一部に独占されるデジタル専制主義をもたらし、桁違いの格差を生み出す懸念もあります。そうならないよう、知と技と人材が集

う大学がより良い社会の実現に向けて、社会変革を駆動する中心になるべきです。特に重要なのは、より良い社会へのビジョンを共有し、皆で協調して行動する仕掛けを作ることです。そのために、人やその心についての理解を深めることは不可欠で、多様な時間スケールで人類の活動を扱ってきた人文学の知恵が本質的に重要です。今回本格始動したHMCは、この構想を推し進める上で重要な拠点なのです。

**齋藤**◇大学と社会、知というものを、いかに編み直すかを考えないといけないと思いました。大学と社会ということについても、センターの設立に大きなご支援をいただいた潮田会長にお話しいただければと。

**潮田**■3年ほど前、メディチ家の人の話を聞きました。ビジネスは永続しないが文化は残るという話でした。メディチ家の富は消えたがルネサンスは消えないという意味だったかもしれません。非常に素敵な言葉だと思い、自分には何ができるだろうと思っていた矢先、東大から東アジアの人文研究拠点の話をいただきました。メディチ家には及びつきませんが、研究を支援するのは経済人として相当楽しいことだという期待を感じています。

私と東大の関わりの一つは、昭和48年に文I・IIのフランス語クラスに入ったことです。担任は蓮實先生でした。こんなすばらしい先生にフランス語を習っていたとは当時は気づきませんでした。もっと勉強すればよかったと思います。もう一つは還暦の頃のことです。従来と違う道を走りたいと思って東大に相談したら、人文社会系研究科に文化資源学の講座があると聞かされました。ビジネスをやっ

てきて、成長の機会が減ったことを実感していました。先はどうなるか見えない。ならば後ろを振り返ってみたいと思った矢先、文化資源学の先生に、これは後ろ向きの学問だといわれ、興味がわきました。3年勉強させてもらい、昔の成長のない社会にも多くの幸せがあったと知りました。現代社会もマイナス成長で何とかなると思うようになったんです。

## 漢字は東アジアの意思疎通ツール

なぜ東アジアの人文研究拠点なのか。東アジアは日本から見ると一つのグローバルな世界でした。日本がかつて経験した国風主義や唐物の誘惑の辺りをもう一度調べ直したらおもしろいと思います。また、文語としての漢字は、日本でも韓国でも中国でもベトナムでも共通です。口語は違っても文語ではコミュニケーションができる。それは、ローマ社会でラテン語が文語としてコミュニケーションツールだったのと同じ。かな文字の何倍も、日本人は漢字だけの文献を書いてきました。(漢字で書かれた様々な史料、中国や日本の絵画作品などの話、略) 日本の人口は減ります。経済でも労働力でもアジアの力を借りないとはいけません。アジアと日本は共通の文化的記憶を持ちます。東アジアの人文研究拠点であるHMCの役割は大きく面白くなると思っています。

**齋藤**◇アジアと日本は、共通の記憶を持ちつつ、その間にはすれも存在します。時間のすれ、憧れのすれ……。蓮實先生が講演で触れた、読むとは書かれたことを敬意をもって受け止めること、という話、歴史を薄皮で見ているという総長の話にも通じます。過去に重ねた

# Humanities Center な地平



齋藤希史  
ヒューマニティーズ  
センター機構長

経験、歴史を受け止めて味わい、そこから広がるものがあると思いました。

**五神**◆1月に参加したダボス会議で世界の学長たちが議論するフォーラムがありました。そこでは、社会の変化に大学が取り残されないようにするにはどうすべきかという、やや受け身の議論が中心でした。私たちは、大学が中心になって社会を良い方向に導くにはどうすべきかという能動的な議論をしてきたのです。大学のミッションをこのように捉えることは世界的にみても先進的な発想だということを最近認識するようになりました。特に、東アジアの地で140年培ってきた東大の独自の知恵を世界に向けて発信し、それを多くの人々と共有し活用すべきです。そのためにはアジアの仲間との協働が重要でしょう。

**齋藤**◆日本の大学は世界の<sup>フロンティア</sup>辺境かもしれせん。それを意識しながら、あえて後ろ向きになったときに違う世界が開けているかもしれない。また東アジアと一括りでいいですが、細かく見ると様々な時間、憧れ、多様な積み重ねのなかで生じる複数の世界のまとまりがあるかと思います。蓮實先生、いかがですか。

## 飛躍には人工的に壊すことが必要

**蓮實**●先ほどの講演とは別話になりますが、理詰めですと考えるがどこかで飛躍しないといけないときの飛躍が、日本人は弱いのではないか、という気がします。そこで何が必要か。異なる要素の混在として、東京大学には女性をいまの倍以上に増やしていただきたいという強い気持ちがあります。飛躍には男女が同数くらいいなければいけない。どう

7月24日、連携研究機構ヒューマニティーズセンター(HMC)の記念講演会が、伊藤国際学術研究センターで開催されました。5月のLIXIL潮田東アジア研究拠点開室を記念したものです。本学26代総長・蓮實重彦先生による刺激的な記念講演「『ポスト』をめぐる～後期印象派からポスト・トゥルースまで」を受けて行われたラウンドスピーチの様をダイジェストでお届けします。

したらよいか。入試の際に男女の定員を同数にすればよい。逆差別が生じるという話もありますが、日本社会が女性を抑圧してきたのは事実であり、その結果が現在の女子学生数に反映されているわけですから、どこかで人工的に壊さなければいけない。それが飛躍につながるのです。(プロ野球チームを増やす話、日本映画が第三の黄金時代にあり、特に東大出身の濱口竜介監督作「寝ても覚めても」は傑作である話など、略)  
**齋藤**◆総長、せっかくですので女子学生の件について何かありましたら。

**五神**◆女子学生の定員を定めるというご提言は直截で、確実に成果が期待できる方法です。逆差別、不平等という捉え方もありますが、これまで東大を受験しなかった多くの優秀な女子学生にも志願してもらったきっかけになれば、結果としてレベルアップに繋がるはず。実現に向けては様々な議論が必要で難易度は高いと思いますが、女子学生の比率を上げるという方向性はとても重要で、貴重なご指摘をいただいたと思います。

**齋藤**◆石井先生はいかがでしょう。

**石井**□蓮實先生の飛躍的な言説に感嘆され、理事の立場を離れて申します。蓮實先生の講演で、ポストは殺戮であると同時に曖昧な形での延命である、という話がありました。ポストというとき我々は無意識にカテゴライズをしています。例えば、印象主義をカテゴライズするからポスト印象主義という概念が生じる。しかしその根拠は極めて曖昧で、何がモダンかを問わないままにポストモダンという言葉が流布するということが繰り返されています。さて、人文科学、自然科学、社会科学などは明らかにカテゴライズです。しかし実態は極めて曖昧です。Humanitiesという英語は、もとはギリシャやローマの古典を意味し、同時に人文学を意味します。人間なしで存在するnatureを対象とするのがnatural science。人間がつくった社会を対象とするのがsocial science。人間自身を対象とするのがhuman science。Humanitiesは概念レベルが違います。scienceか否かに一線がある。ひところ文系の学問は不要だと騒がれましたが、そこで攻撃されたのはscienceでないもの、つ

まりhumanitiesです。Social scienceは文系といいますが、経済学や法学や政治学が不要だという話は聞かない。そこは極めて曖昧なままに文系不要論が流布しました。非常に曖昧な形でのカテゴライズがなされ、役に立つ、立たないという線がscienceとそうでないもの間に引かれている。私は、humanitiesはあらゆるscienceの基盤になるものだと思います。人間が人間である根拠を問うのがヒューマニティーズだと捉えながら、センターが発展し、やがてポストヒューマニティーズといわれて延命する日が来ることを願っております。

**齋藤**◆蓮實先生の講演でジェネラルの話がありました。専門分化されたものではなくその前のもの、あるいは基盤としてのものということ、いまの話は通じるなと思いました。さて、時間となりました。この辺でラウンドスピーチを終了いたします。



記念講演会に先立ち、総合図書館4階にあるLIXIL潮田東アジア人文研究拠点室のテープカットセレモニーと見学会が行われました。この国際人文研究拠点は、株式会社LIXILグループおよび潮田洋一郎氏の財政的支援により設立されました。木組の壁が印象的な室内は生産技術研究所・川添善行先生の設計によるものです。

開かれた大学として「知の協創」を推進するために

# 東京大学 社会連携活動 2018

## 1 高校生のための オープンキャンパスが進化

8月1～2日、高校生のための東京大学オープンキャンパス2018を開催しました。参加登録者は約20,000名（初日約11,000名+2日目約9,000名）となり、ほぼ昨年と同様。例年にも増して過酷な暑さの中での開催でしたが、大きなトラブルは発生しませんでした。各部局による恒例の人気企画に加え、今回は新しい試みとして、総合図書館前を中心に特別企画「東大アゴラ」を実施しました。地下のライブラリープラザを「学部情報まごらウナジ」として開放し、各学部の概要を説明するパネル展示や、学内の様々な配布物をまとめて見られるコーナーとして、また酷暑を避ける休憩場所として多くの来場者に利用してもらいました。地上では、東大グッズや書籍、軽食を楽しめる「いちよう市場」を開催。噴水広場には横手焼きそば、タピオカドリンク、ビーフステーキ、南インドカレーなどのキッチンカーが並び、正赤通りには運動会のイチ公ぬいぐるみブース、研Q室ヨーグルトの縁でつながる福島県立岩瀬農業高校のアイスマイル屋さん、東大関連の古本を集めたブックバスも登場、一帯は緑日のような雰囲気になりました。



## 2 128回目を迎える市民向け講座の嚆矢 東京大学公開講座



↑第127回ポスター。↓第128回の告知。

1953（昭和28）年以来、大学で培われた知を学外に開放してきた東京大学公開講座は、春と秋の年2回、第74回からは安田講堂を会場に開催しています。当初は部局別に選出された先生が各々の専門分野の最新研究を講義する形でした。第21回から総括テーマを設けてテーマに沿った研究内容を講義する形となり、第115回からは1日ごとにサブテーマを設定し3講義（+総括討議）×3日間という形が定着しています。この5～6月に行われた第127回では、総合文化研究科長の石田淳先生が委員長となり、「ディレンマ」をテーマに開講。11～12月の第128回は、工学系研究科長の久保達也先生を委員長に迎え、「罅れ」をテーマに開講されます。



## 3 東京大学コミュニケーションセンター UTCCに新商品が登場



1月に発売された「ハナーンチョコレート」は、東洋文化研究所・後藤絵美先生の研究を機に生まれた、ハラール認証マーク入りのチョコ。ハラール認証はイスラム教徒の消費者に安心を提供する仕組みですが、最近は認証基準が厳しくなり過ぎて、むしろ不安をあおる要因になっているとか。「ハナーン」はアラビア語で「思いやり、優しさ」。チョコを発売に、認証以外に誰もが安心して食卓を囲めるようにする工夫がないか考えようと呼びかけます。ミルク、ホワイト、ダークの3種類が30粒入って1,080円（税込み）。一方、オープンキャンパス2018で先行発売されたのは、「研Q室のヨーグルト」ドリンクタイプ。薬学系研究科・関水久先生（名誉教授）が被災地復興の願いをこめて東北協同乳業と共同開発したあのヨーグルトが新スタイルで楽しめます。90g、150円（税込み）。

東京大学は、世界に向かって自らを開き、社会の過去・現在・未来に対して責任を持ちうる教育・研究活動を行いながら、大学と社会との双方向的な連携を推進することを基本理念としています。よりいっそう「社会に開かれた大学」として、社会とともに歩み、社会と協働して課題を発見・共有し、新たな知とイノベーションを生み出すための社会連携活動。その最新の姿の一端を紹介します。



## 「唯一無二」の次世代リーダー向けプログラム EMP が10周年

東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム (EMP) は、様々な分野の第一線で活躍する社会人受講生と学術分野の最先端で活躍する本学教員とが、互いに切磋琢磨する唯一無二の場です。2008年の開講以来、修了生は400名を超え、修了後もEMP倶楽部 (同窓会) などによる自主的な学びの機会を通じて「知の統合化」の努力が続いています。10周年を記念し、8月29日には『世界の語り方』と題する2冊組の書籍を東京大学出版会から上梓。9月12日には伊藤謝恩ホールにて記念シンポジウム「知の統合化の先へ」を開催します。10年間の歩みの中で、EMPは何を発信し、



何を築きあげてきたのか、この先に何を見ているのか。……ご期待ください。

## タイムリーなテーマが目白押し グレーター東大塾は16回目に

時期	テーマ	タイトル	塾長
2018春期	アメリカ	「21世紀のアメリカ〜トランプのアメリカを読む」	西崎文子・矢口祐人
2017秋期	人口と社会	「持続可能な成長型超高齢社会に向けて」	白波瀬佐和子
2017春期	人工知能	「人工知能技術の進歩と社会革新」	石川正俊
2016秋期	イスラーム	「イスラームとどう付き合うか」	長沢栄治
2016春期	水素	「水素社会」から日本のエネルギーの未来を考える」	瀬川浩司
2015秋期	アフリカ	「飛躍するアフリカと新たな視座」	遠藤 貴
2015春期	水	「持続可能な社会のための水システムイノベーション」	古米弘明

世界的視野に立って社会の発展、科学・文化の創造に貢献する人を支援するために2010年に始まったのが、グレーター東大塾。塾長となる教授の指導のもと、大学と社会が連携して課題に取り組み、問題解決のネットワークを構築するのが目的のプログラムの特徴は、先端・専門性の高い現代社会的なテーマを設定すること。水、アフリカ、水素社会、イスラーム、人工知能、超高齢社会、そして「21世紀のアメリカ〜トランプのアメリカを読む」と並ぶ最近のラインナップを見れば、それは一目瞭然でしょう。この秋 (9~11月) には、生産技術研究所の喜連川優 & 野城智也両先生を塾長に、「すまうIoT:「コトのインターネット」へと進化させる技術群」を開講の予定です。

## 駅前「渋谷スクランブルスクエア」構想を推進 渋谷を縁に5大学&電鉄3社が連携

渋谷スクランブルスクエアは、東急、JR東日本、東京メトロの電鉄3社が推進し、2019年度に開業を予定する、渋谷駅直結の大規模複合施設 (地上47階地下7階) です。7月12日、東京大学は、施設の運営者「渋谷スクランブルスクエア株式会社」、東京工業大学、慶應義塾大学、早稲田大学、東京都市大学と、産学連携でのイノベーション創出や発信およびクリエイティブ人材の育成を目的に、連携事業協定を締結しました。

本協定の取り組みの一つである「渋谷SCSQイノベーションプロジェクト」では、施設15階に

計画する産業交流施設を拠点とし、渋谷駅を結節点とする交通機関の沿線に立地する5大学が連携します。大学の知と、渋谷の多様なユーザーや民間企業のノウハウなどを組み合わせ、社会課題解決に向けた取り組みや情報モビリティ分野における社会実装を行います。

7月19日には、連携イベント第一弾として、パネルディスカッション「マチとダイガクの交差点」を渋谷ヒカリエにて開催し、生産技術研究所の池内与志穂先生が参加しました。渋谷の地域特性を活かしたイノベーションが始まっています。



## サテライト拠点も設置 三重県との連携・協力を開始

東京大学と三重県は、三重県内の地域課題に迅速かつ適切に対応し、活力のある個性豊かな地域社会を形成していくため、相互に連携・協力を行うことで合意しました。地域の課題対応のための学術研究の推進や、地域における取組を通じた人材の交流と育成、学術研究の成果の社会実装などについて、相互に連携・協力を行っていきます。また、地域未来社会連携研究機構のサテライト拠点を全国で初めて三重県内に設置することとなりました。サテライト拠点では、都市や農山漁村、森林、観光地、工場集積地、再生可能エネルギー施設など、実証フィールドとしての特性を生かした三重県にふさわしいテーマを選定し、県内大学等とも連携して研究に取り組んでいきます。

前列左から、東京工業大学学長、早稲田大学総長、東京大学総長、慶應義塾長、東京都市大学学長。後列左から、渋谷スクランブルスクエア取締役社長、東京急行電鉄取締役会長、東日本旅客鉄道取締役会長、東京地下鉄取締役会長。

# ひょうたん島通信

大槌発! 第45回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## いよいよ再出発! 7月20日に新棟完成記念式典

**河村知彦** 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター長・教授

震災から7年、ようやく新しい研究実験棟と宿泊棟（共同研究員宿泊棟）が完成しました。旧敷地より数百メートル山側に再建された3階建ての研究実験棟は、周辺住宅地からひょうたん島を望む景色を妨げないよう斜面を利用した圧迫感のない建物になっています。大きな窓と広い廊下が特徴的な非常に明るいつくりとなりました。研究機器等の整備は現在進行形ですが、今年度中には被災以前の機能を完全復旧させる予定です。海側の部屋から眺める大槌湾とひょうたん島はまさに絶景で、世界中から集う海洋研究者に素晴らしいインスピレーションを与えてくれることでしょう。平屋建ての宿泊棟は共同利用研究者のための施設で、最大35名の受け入れが可能です。広い食堂スペースはアットホームな雰囲気に仕上がりに、小規模なセミナーなども開催できます。

7月20日には大槌町内の「三陸花ホテルはまぎく」で新棟完成記念式典・祝賀会を開催し、多くの来賓をお迎えしました。翌21日の一般向け施設見学会には200名を超える方々にご来場いただき

ました。研究所の卒業生でパルンアーティストの須原三加さんによる素晴らしい作品やパフォーマンスが、この記念すべき日に花を添えてくれました。

新装開店したセンターでは、海洋研究拠点としての活動はもちろんのこと、地域の知恵袋的存在として復興・発展にも貢献したいと考えています。研究実験棟のエントランスホールと隣接するギャラリーは広く一般に開放し、研究者と地域の人たちが交流を深める場として活用したいと思います。エントランスホールの天井一面には、新進気鋭の現代アート作家、大小島真木さんによる「Archipelago of Life 生命のアーキペラゴ」が描かれています（表紙参照）。海をイメージした幅8メートル近い大作で、大気海洋科学とは異なる芸術の視点から海を楽しむことができます。また、大気海洋研究所

新しい研究実験棟と、多くの来賓にご出席いただいた新棟完成記念式典。



と社会科学研究所の協働による文理融合型のプロジェクト「海と希望の学校 in 三陸」を4月に開始しました。三陸各湾の海洋科学・社会科学的特性をベースとしたローカルアイデンティティの再構築を通じ、地域に希望を育む人材を育成することを目的としています。詳細については、今後このコーナーでお伝えしていく予定です。

皆様のお力添えにより、センターは大槌の地で新たなスタートを切ることができました。今後は、これまで以上に国際的な沿岸海洋研究拠点として機能すると同時に、被災地にある研究機関としての役割を果たしていきたいと考えています。

## 調査船「弥生のつばやき」 「新青丸」と共に



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早4年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、センター界隈の最新トピックをお伝えするこのコーナーも担当しています。

この7月は、国際沿岸海洋研究センターのイベントが盛り沢山でした。ひょうたん島通信でご紹介した新棟完成記念式典の翌日（7月21日）には、地域住民の皆様を対象とした「施設見学会」が開催され、多くのお客様にお越し頂きました。このいずれも、私は海から眺めているのみでしたが、7月23日には、私がメインキャストを務める「『新青丸』との共同調査」に参加しました。学内広報バックナンバー1459「ひょうたん島通信 第22

回」に「新青丸」の紹介は譲りますが、長さにして私の約5倍、総トン数に至っては100倍以上の体格差のある「新青丸」と共に、大槌湾という晴れ舞台（当日は生憎小雨混じりの天候でしたが）に立つことが出来ました。

「新青丸」は引き続きの調査のために太平洋へ漕ぎ出して行き、私も、船出を見送りつつ別の調査へ向かいました。

今回は好天の下で、改めて共に舞台に立ちたい、と心から思いました。



見よ、この体格差。でも決して引けはとりません。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

# 総長室だより 第13回

～ 思いを伝える生声コラム ～

東京大学第30代総長

**五神 真**



## 未来への布石:ダイバーシティを広げる

異分野の研究者と共に新しい学問を創る、それは東大の重要な魅力です。そのためには部局を越えた連携が重要で、それを促進する仕組みとして連携研究機構制度を導入しました。昨年7月に文系部局による最初の機構としてヒューマニティーズセンターが設置されました。今般LIXILグループと潮田洋一郎・同社取締役会議長のご支援により、総合図書館の4階に「LIXIL 潮田東アジア研究拠点」を開室しました。この開室記念式典が7月24日に伊藤謝恩ホールで行われ、私も参加しました。

まず、第26代総長の蓮實重彦先生が「『ポスト』をめぐって」と題して講演されました。蓮實先生は、接頭語としての「ポスト」は、対象の概念を殺戮すると同時に曖昧な形で延命させてしまうと鋭く指摘されました。続くラウンドスピーチで、私は、良い社会作りには人文系の知恵が不可欠と述べ、続いて潮田氏から、所蔵美術品の紹介も交えつつ、この先の社会がどうなるか、過去を振り返ることで考えたいと思い東大で学び直したというお話がありました。

パネル討論の終盤で、蓮實先生から、東大生の男女比の偏りが一向に改善されていない、女子学生枠を設けてでも是正すべきというコメントが突然飛び出しました。少々戸惑いましたが、これは私も常々考えている課題です。東大を受験しなかった優秀な女子学生が東大を志願するようになれば、女子学生比率はもちろん、全体のレベルも必ず上がるはずだと発言しました。蓮實先生は総長として、東大の男女共同参画に先鞭を付けられました。それから20年、教員や学生の女性比率は多少改善はしているものの、効果は限定的です。東大で学ぶのに相応しい学生は男女を問わず多くいるのに、学部受験者・入学者の男女比が大きく偏っているのは、本来東大で学んでほしい学生を十分惹きつけられていないことを意味します。海外の有力大学では男女比はほぼ半々ですし、東大でも留学生の女性比率はずっと高いのです。海外で活躍する方々からは、今の女子学生比率の低さは問題だ、国際社会から東大は遅れていると見られる、と言われます。これは、東大にとって深刻で、早急な対応が必要です。まず、入学後の学生生活を女子学生にとって過ごしやすい環境へと改善することです。インクルーシブな社会づくりをめざす東大としては、LGBT等にも配慮したダイバーシティを重視したキャンパス環境造りを進めるべきです。多目的トイレの整備などは、目に見えてわかりやすい施策かもしれません。誰にとっても過ごしやすいキャンパス環境を目指したいと思っています。

## UTokyo バリアフリー最前線!

第9回

障害がある職員のお仕事拝見③

ことだまくん



## ゴマ粒大の蝶の卵を逃さず除去!

—いつもどんな仕事をされているんですか。

「月・水・金は、ウマノズクサの葉の裏についたジャコウアゲハの卵を取ります。幼虫になると葉を食べてしまうからです。卵はゴマ粒ぐらいです」

—そんなに小さいと見逃しちゃいませんか?

「大丈夫です。得意です。他には、3ヶ所あるトイレの掃除です。毎日です。週1回は2人組で念入りにやります。タワシで便器を磨き小便器の目皿を洗います」

—好きな作業、嫌いな作業などはありますか。

「ゴミ拾いは面白いです。少し宝探みたいです。アメの袋とか、ガラスとか、金属の棒とか。自転車の鍵は受付に届けました。嫌だったのは側溝の掃除です。泥を取るとき、スコップがうまく使えませんでした」

—ここに来る前は何をやっていましたか。

「作業所にいました。そこの先輩が先に来て、推薦してくれました。前より仕事がいりいりで楽しいです。梅の実を袋につめてお客さんに配ったこともあります」

—阿部さんの障害はどんなものですか。

「『愛の手帳\*』を持ってます。そこには4度と書いてあります。時間を守るのは得意です。4時30分に起きて7時35分に家を出て7時59分の電車に乗って8時23分に到着です。洗濯当番の日は7時5分の電車に……」

—精密! 仕事以外で好きなものは何ですか。

「スポーツ観戦です。巨人ファンです。この前、東京ドームに行ったときはヤクルトに3-0で勝ちました。ユニフォームは上原です。携帯ストラップは阿部です。名前が同じだから。土曜日はジムで体を鍛えています」

—甲本ヒロト似の阿部さん。今後の目標は?

「体調管理に気をつけます。去年夏バテしてしまったので。竹ぼうきが使えるよう、溝掃除もがんばります」

### ◎日光植物園環境整備チーム 竹内 農さん

「デザイン関係の専門学校を卒業後、日光植物園が初の職場です。作成したしおりや絵がお客様に好評だったり、多くのお客様が来園してくれると、とてもうれしいです。外作業が中心なので夏は暑さで疲れますが、チームで協力してがんばっています。私は広汎性発達障害と診断を受けており、会話が苦手、物事をすぐ忘れがちです。苦手な部分を克服できるよう努力して社会人のマナーや働くことの大切さを学び、成長したいと思っています」

## バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

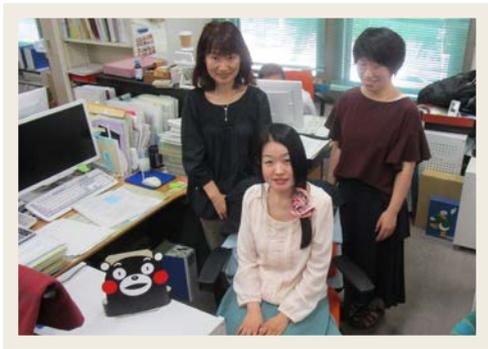
※東京都が知的障害の方に交付する手帳。4度が最も軽度。

## ワタシのオシゴト 第148回

## RELAY COLUMN

先端科学技術研究センター 山縣真依子  
財務企画チーム

## 日日是好日をモットーに!



両手に華で中央が私です。

正式名称を告げてもなかなか通じず、「あの一、先端研です」で、「ああ、先端研さん!」とあっさり通じてしまう嘘のような本当の話の先端研は、カブトムシやクワガタ（今年のキャンパス公開時には、結構大きなへビにも遭遇）などが出没する自然溢れる駒場Ⅱキャンパスにあります。

私の仕事は、資産、外部資金の収支報告や伝票処理など経理を担当しているのですが……。総事業費の7割を外部資金で運営している部局ということもあって、外部機関とのやり取りが多く、時には東大ルールが通じず悩ましい案件も……。解決するべく周りの方々にいろいろと助けていただいて、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

そして先端研といえば、駒場Ⅱキャンパス公開時に任命された「くまモンせんたん研究員」。可愛らしいだけでなく、デキるゆるキャラ「くまモン」に乞うご期待☆です!



駒場Ⅱキャンパス公開終了後にて。

得意ワザ：美味しいお菓子とパンを探索する

自分の性格：マイペース

次回執筆者のご指名：青木 理さん

次回執筆者との関係：前部局の同窓、お隣りの席のご縁

次回執筆者の紹介：抜群のトーク力と女子力の持ち主

IRデータ室  
よもやま話 第7回

経営企画部長 岡 貴子

## 東京大学におけるIRの取組

今年の4月より文部科学省から東京大学の経営企画部長に転任してまいりました。本省にいた時には、大学におけるIRの重要性、様々なデータ分析などに基づく大学経営の必要性などを説く立場でしたが、実際自分が担当することになるとその難しさを実感しています。

IRデータ室は、2017年の4月に大学の経営や部局の運営に積極的に活用していくため新たに設置されました。IRデータ室では、室長、副室長の他に本部の職員の方々に室員となっただき、協力しながら取組を進めています。「教学部門」「研究部門」「社会連携部門」「管理運営部門」それぞれにおいてデータ収集・分析などの活動を行っています。

昨年度は、学内に散在するIR情報を収集し、本部内でIRデータを共有するためのサイト「東京大学IRデータサイト」を構築しました。今年度は各部局においても大学全体のデータを閲覧できるような体制整備を進めています。これらにより、エビデンスに基づく大学運営の意思決定支援を進められればと思います。

大学の教育研究活動の効果を一律の指標、数字のみで評価するのは難しいのですが、一方で、大学ランキングなど分かりやすい指標が社会的に注目されているのも事実です。多種多様なランキングが存在していますが、それぞれの指標が異なるため、東京大学の順位もそれぞれで異なります。研究力の評価など本来ランキングになじまないものもありますが、それぞれの経時変化を見た上でその内容を分析し、当事者としてきちんと説明できるようにすることが必要と考えています。そのために、学内でIRデータを把握し、相互補完的に活用していくことも重要となります。

また、東京大学では、2015年10月に「東京大学ビジョン2020」を策定し、価値創造から社会実装への取組、「知のプロフェッショナル」の育成、卓越した研究拠点の拡充・創設などを進め、「運営」から「経営」へと経営力強化の取組も行っています。また、2017年6月には指定国立大学法人に指定されました。これは世界最高水準の教育研究活動の展開が相当程度見込まれる国立大学法人を指定するものです。

「東京大学ビジョン2020」に基づいた取組、指定国立大学法人としての取組を今後更に加速させていくためにも、IRに求められる役割、機能はますます重要になっていきます。

IRデータ室 ir-data.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

# インタープリターズ・ バイブル

第133回

総合文化研究科 准教授  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

豊田太郎

## Why? と Just Wow!

私は、講義を受講している学生に、理科の実験実習で印象深かった体験はどんなものか尋ねることが多い。回答は、テルミット反応（閃光と高熱が生じる金属の化学反応）、モンキーハンティング（斜めに打ち出された物体の落下運動）、生物の解剖実習、化石の採掘体験など様々であった。こうした原体験は自然科学への入り口として重要である。私自身、小学生の頃にヨウ素デンプン反応をやってみて理科（特に化学）を好きになったクチである。これら回答で注目したいのは、こうした実験実習においては、学生が“Why?”のみならず“Just Wow!（意訳：コレはスゴイ！）”を感じていたことである。私たちは、実験実習する前に事前説明を聞いたり自ら予習したりして「この程度のものかしら」と憶測する。その後、その憶測が裏切られた時、感覚的衝撃を受けるのだろう。

インターネットで閲覧できる実験実習の動画の内容は、年を追うごとに充実し、過激さも増している。拡張現実や仮想現実の技術がこの流れを加速するだろう。本学では「VR教育研究センター」が発足したという。では、私たちがこれらを視聴者として追体験すると、実際の実験実習で“Just Wow!”を感じる機会が失われ、自然科学の魅力を感じにくくなってしまおうだろうか？

私はこの疑問に否と答えたい。むしろ、ゲーテの『色彩論』に代表される、自然現象に構成論的にアプローチする手法が、まさに現代に合っている。動画等を見たら、監督者のもと、安全指導を受けた上で、自分が実験しても全く同じ結果になるのか、若干でも異なる実験条件をやってみたらどうなるか、各自が自分の手でいった実験実習の結果をまとめ、インターネット上で発信し共有してはどうか。そのような活動を通じて、新たな“Just Wow!”を感じる原体験をもった学生が一層増える仕組みをつくりたいと私は考えている。

ヨウ素デンプン反応の“Why?”については、私は大学院生になってようやく理解できたクチだ。実際のところ、2016年の先端研究で有力な実験データが発表されたばかりである<sup>\*</sup>。学生や若い世代の“Just Wow!”に触発されて湧き起こる“Why?”を私は大事にしたい。

<sup>\*</sup> Madhu, et al., *Angew Chem. Int. Ed.* **2016**, *55*, 8032.  
(重要度が高く世界で注目される化学専門誌)

科学技術インタープリター養成プログラム

# 蔵出し! 文書館

The University  
of Tokyo  
Archives

第15回

収蔵する貴重な学内資料から  
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

## 農科大学に遺された三池炭鉱の風景

干潮の有明海の浜辺に引き上げられた小さな漁船の群。遠方では高い煙突が煙をもうもうと



はきだし、手前を蒸気機関車が白い煙をあげて此方に向かってくる。20世紀初頭の熊本県荒尾市四ツ山の光景です。

荒尾市から福岡県大牟田市に広がる三池炭鉱は、第二次大戦期までの日本の主要エネルギー源であった石炭を大量に供給する役割を担いました。当初、明治政府の官営事業としてはじまった炭鉱は、1889年より三井組の経営となり、1892年に三井鉱山が創立され採炭が本格化していきます。三池炭鉱の炭層は地下にあったため、作業員は坑道まで降りて作業せねばなりません。坑口には昇降用のケージ（エレベータ）が設置され、それを支えるための櫓が現在も宮原と万田に残っています。ケージの昇降用ワイヤーの巻き揚げ機、地下水くみ揚げのための大型ポンプ、石炭を港へ運ぶための鉄道、遠浅の有明海に干潮時でも大型の船舶が停泊できるよう開門式のドックを備えた三池港などが建設されました。

これらの施設は、近代化の装置としてこの地の景観を大きく変えました。三池炭鉱を撮影した写真が数多く撮影され、市場に広く出回ります。冒頭の光景が記録された写真は、帝国大学農科大学の地質学・土壤学講座（現在の土壤圏科学研究室）教授の脇水鉄五郎の遺した資料に含まれています〔東京大学文書館 F0227/SF01/0070〕。台紙には説明書きが添えられ、その裏書きのひとつから、明治38（1905）年10月24日付で、牧野良平という人物から脇水に贈られたものと考えられます。脇水資料の三池炭山関係写真の被写体は、櫓やポンプなどの大型設備、ツルハシを持って切羽に立つ鉱夫、そして大牟田と荒尾の風景を写したのものもあります。同じ被写体が同じような構図で幾度も撮られ、大量の複製が市場に流通しました。こうした被写体の表象の「型」は、三池という場所について人びとが共有して持つことになる景観のイメージに影響を与えたはずで、大牟田・荒尾の記憶の場としての三池炭鉱の施設の一部は、2015年にユネスコの「明治日本の産業革命遺産」の一部として指定されました。  
(特任助教・宮本隆史)

東京大学文書館

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル
7月10日	本部学生支援課	伝統の東京大学・京都大学対校競漕大会で本学漕艇部が完全優勝！
7月10日	本部奨学厚生課	平成30年台風第7号及び前線等に伴う大雨で被災した世帯の学生の皆さんへ
7月12日	本部環境安全課	平成30年度「東京大学安全の日」講演会 開催
7月12日	理学系研究科・理学部	雷雲に隠れた天然の加速器を雷が破壊する瞬間を捉えた 放射線・大気電場・電波による高エネルギー大気現象の観測
7月13日	本部環境安全課	第2回 東京大学環境安全衛生スローガン募集 実施報告
7月14日	本部入試課	平成32年度(平成33年度入学者選抜)以降における入学者選抜方法の検討について
7月17日	教育学部附属中等教育学校	教育学部附属中等教育学校で教育実習が行われました
7月17日	教育学部附属中等教育学校	教育学部附属中等教育学校で酒井邦嘉教授の特別授業が行われました
7月18日	学生相談支援課	「知の創造的摩擦プロジェクト」第26回交流会の開催
7月18日	本部博物館事業課	総合研究博物館本郷本館にて特別展示『珠玉の昆虫標本—江戸から平成の昆虫研究を支えた東京大学秘蔵コレクション』内覧会が開催される
7月19日	情報基盤センター	学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点 第10回シンポジウムが開催されました
7月19日	広報戦略本部	「超短時間労働」で障害者雇用を多様化する 1日15分からでも企業で働けるモデルの研究,社会実装
7月27日	本部国際戦略課	北京大学幹部研修を実施
7月30日	カブリ数物連携宇宙研究機構	Kavli IPMU 一般講演会「宇宙×世界」を実施—哲学と科学の交流
7月30日	本部広報課	サイエンスへの招待・森を食べる植物   広報誌「淡青」36号より
7月31日	本部広報課	良い社会のためのESG投資とSDGs   総長室だより~思いを伝える生声コラム~第12回
8月1日	本部国際戦略課	東京大学—清華大学戦略的パートナーシップ覚書調印式・合同シンポジウム開催
8月2日	広報戦略本部	進化する巨大仏典デジタルアーカイブ AI技術も取り入れ新しい人文学研究に道を開く
8月6日	生産技術研究所	生研英文広報誌「UTokyo-IIS Bulletin Vol.1」を公開しました
8月8日	本部博物館事業課	総合研究博物館で「かたちを読み解くハンズオン・ギャラリー」が開催される。
8月8日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム 第11期 履修証授与式の開催
8月10日	史料編纂所	「陽明文庫設立80周年記念特別研究集会—最新の研究成果の報告と陽明文庫の過去と未来—」の開催
8月10日	本部社会連携推進課	高校生のための東京大学オープンキャンパス2018開催



## CLOSE UP

### 京都大学との対校戦で本学漕艇部が完全優勝!

(本部学生支援課)



リードを広げる東大エイトクルー。



東大フォアクルー。

7月1日に滋賀県瀬田川で東京大学と京都大学の対校競漕大会(ボート双青戦)が開催されました。69回目を数える本競漕大会の起源は、大正13年の旧制第一高等学校・第三高等学校対校戦にまで遡ります。旧制一高が教養学部のルーツの一つであることから、出場は今もなお2年生以下(教養学部の学生)に制限され、旧制高等学校同士の対抗戦という伝統を引き継いでいます。また、本大会は、大正9年に行われた第一回東大・京大対校競漕大会にも関連があります。世界的に有名なケンブリッジ大とオックスフォード大の対校戦(The Boat Race)に倣って、日本で初のエイトの対校レースとして開催されたものです。その際、抽選で定められ

た東大の淡青色、京大の濃青色が、その後両校のスクールカラーとして定着したとされます。

レースは、伝統の2マイル(3200m)レースにおいて、フォア種目で25秒、メインイベントのエイト種目(8人の漕手と1人の舵手で進める花形種目)では32秒の大差を付け、本学漕艇部が完全勝利を収めました。さらに、同時に行われた医学部対校戦(1000m)においても11秒差で15年ぶりの勝利を収め、本学漕艇部にとっては記録的大勝利の日となりました。今後、本学漕艇部は、最大の目標である全日本大学選手権(9/6-9/9)での優勝・メダル獲得に向けて、厳しいトレーニングを積み重ねていきます。漕艇部の今後の活躍にご期待ください。



## CLOSE UP 「安全の日」講演会とスローガン表彰式を開催

(本部環境安全課)



総長賞は地震研究所の藁谷里菜さんが受賞しました。

7月3日、医学部教育研究棟鉄門記念講堂において平成30年度「東京大学安全の日」講演会「大学のリスクマネジメント」を開催しました。講演会では、横浜国立大学リスク共生社会創造センター／大学院環境情報研究院 野口和彦センター長／教授「大学におけるリスク・危機への対応の仕組み」、名古屋大学環境安全衛生管理室 富田賢吾教授「事故から考える大学のリスク」、本学環境安全本部 山本健也助教「顕

在化から行動化へ～予防医学視点での職場巡視～」という3つのお話がありました。講演に先立ち、安全意識の醸成を目的として学内募集した「第2回環境安全衛生スローガン」の表彰式も行いました。今回は、24部局の74名から延べ169件の応募があり、特に優秀な4作品が総長賞、環境安全担当理事賞、環境安全本部長賞を受賞しました。表彰式後には受賞作品を一覧にしたポスター（左画像）が配布されました。



## CLOSE UP 特別展示「珠玉の昆虫標本」の内覧会を開催

(総合研究博物館)



内覧会風景。展示室の四方壁面と中央に多数の昆虫標本が展示された壮観な光景に驚嘆の声があがりました。

7月13日、総合研究博物館本郷本館にて特別展示「珠玉の昆虫標本—江戸から平成の昆虫研究を支えた東京大学秘蔵コレクション」の内覧会を開催しました。本館収蔵の約70万点の昆虫標本のうち、日本の昆虫研究史の源流ともいえる学術標本から現在に至るまで継続的に収集、研究されてきた秘蔵コレクション約40,000点を一挙公開するもの。約200年前に製作された日本最古の昆虫標本、近代養蚕学の父・佐々木忠次郎やミツクリザメで知られる箕作佳吉の

昆虫標本、昭和初期に採集された鳥類学者の侯爵・山階芳麿の昆虫標本、ブータン国王陛下から贈呈されたブータンシボリアゲハ、昆虫学史上に名を連ねる加藤正世、五十嵐邁、石川良輔のコレクションなどを含みます。記者発表では諏訪元館長と企画・総指揮を務めた矢後勝也助教が概要説明と記者との質疑に応じ、内覧会とレセプションでは福田裕穂理事・副学長をはじめ学内外から多くの関係者が出席しました。特別展示は10月14日まで実施されます。



## CLOSE UP 科学と哲学が交流する講演会「宇宙×世界」を開催

(カブリ数物連携宇宙研究機構)



台風による荒れ模様の天候にも関わらず会場はほぼ満席。ストリーミング配信の視聴数と合わせると約900名の参加となる盛り上がりでした。

6月10日、カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU) は、講演会「宇宙×世界」を日本科学未来館で開催しました。数学と物理学と天文学の研究者が「宇宙の謎に迫る」ことを目的に研究を進めるKavli IPMUが、根源を問うという点を同じくする哲学との交流を進める活動の一環です。野村泰紀Kavli IPMU主任研究者／UC Berkeley教授による「我々の宇宙を超えて」と題する講演は、マルチバース宇宙論について、また科学とは何かを深く考える内容でした。マルクス・ガブリエルボン大学教授による「宇宙・世界・実在」と題した講演では、まず野村教授のマルチバース宇宙論と自身の哲学的な論

理的空間が非常に近いのは単なる偶然ではないとの応答がありました。そして、「世界は存在しない」という消極的な提題の後、世界とは意味の場が局所的に重なる網目構造であり、それ以外にすべての文脈という包括的な全体があるのではない、という考え方を提示、全体というものが存在するという考えの根幹にある3000年来のアリストテレス論理学も棄却すべきではないかとの提案がなされました。その後の対談では、物理法則や人間の営みについて還元主義的な視点と決定論的な視点から議論がなされ、最後に講師を囲む懇談会も実施。最先端の科学と哲学が交流する刺激的な会となりました。



## CLOSE UP 陽明文庫設立80周年記念特別研究集会を開催

(史料編纂所)



陽明文庫長・名和修氏の講演「陽明文庫の設立から、デジタル画像の公開まで」の様子。講演会には学内外から約280名の参加がありました。

7月15日、伊藤謝恩ホールにて、「陽明文庫設立80周年記念特別研究集会—最新の研究成果の報告と陽明文庫の過去と未来—」を、公益財団法人陽明文庫と史料編纂所に研究拠点を置く科学研究費補助金「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展」(研究代表者 田島古史史料編纂所教授)の主催により開催しました。この研究集会では、本年11月に設立80周年を迎える陽明文庫所蔵の近衛家伝来資料に関する最新の研究成果を示すと共に、1938年の財団法人設立からの同文庫の歴史や、

史料編纂所による同文庫の調査、同文庫所蔵資料を底本として編纂した『大日本古記録』等の史料集の学術的意義を、科学研究費によって撮影した高精細デジタル画像等を用いて紹介しました。徳仁親王(学習院大学史料館客員研究員)による「陽明文庫に残された三点の牛車絵図」のほか、全8名の研究者から研究報告・講演が行われました。その後、松木則夫本学理事の挨拶で始まった情報交換会では、本学出身の西脇隆俊京都府知事や、島谷弘幸九州国立博物館長による情報発信もありました。



## 親を看取るということ

実家で一人暮らしをしていた母が倒れたのは4月23日の早朝である。救急車の手配や入院の手続きは県外に住む妹が対応した。私は24日午前の研究室のゼミを終えた後帰省し、その後の対応に当たった。寝たきりになりそうであったので、25日の朝から市役所で介護認定の申込をし、病院の社会福祉士の方に入所可能な介護施設を探してもらうこととなった。この日のうちに自宅に戻り、翌26日は大気海洋研究所共同利用研究集会に参加した。同じ日、実家には妹が向かい、母を見舞うとともに父が以前入所していた介護施設を当たったが、既に満室であった。27日にはまた実家に戻り、空室のある介護施設を見学し、そのうちのひとつにお願いすることとなった。淡青評論執筆の内々の依頼メールがあったのは、ちょうどその27日の午前のことである。今後の状況もはっきりしないのでお断りしようかと思っただけ、何かの参考になればと思い、一連の体験を書かせてもらうことにした。連休明けの5月8日には退院となり、即その施設に入居することとなった。

今回手早く介護施設の手配に至ったのは、昨年の辛い経験によるものである。昨年の同時期、父が動けなくなり、実家での老々介護が破綻した。介護に関する知識は全くなく、手探り状態での対応となったが、どんどん悪化する状況を前に対応は常に後手にまわった。最終的には介護施設に入居したものの、この

間3か月近くかかった。幸い教育や研究に大きな穴はあけずに済んだが、これが修論や学位論文の追い込みや審査の時期であったら多くの方に迷惑をかけていたと思う。

最近の子育てに関する支援が比較的充実してきており大変喜ばしい事である。しかし、介護も教育・研究への影響が大きい。各個人が介護に関する知識を付けるとともに、何らかの支援も必要であろう。裁量労働制のおかげで、午前中に研究室のゼミを終え午後から帰省、早朝実家を立ち午後の教授会に出席といったことが可能であったのは大変助かった。また妹とのチームプレーがうまく機能したことも大きかった。介護の問題はだれにでもまた突然に降りかかってくる。あまり考えたくない話であるが、何も知らないでいると対応は後手に回り、仕事や生活への影響も大きくなる。

両親は私が十数年前に海洋研究所に転職した時ずいぶん喜んでいて。その父も昨年亡くなり、母も介護施設に入った。今回、学内広報に登場してもらったが最後の親孝行となったのだろうか？

平松一彦  
(大気海洋研究所)